



畜種アップ アニマルウェルフェアの素案を発表 ～最大のポイント、飼養密度に参考となる基準を設定

社団法人畜産技術協会は、畜産に関する技術開発や知識の普及の一環として、アニマルウェルフェア（指針では快適性に配慮した家畜の飼養管理と定義）の振興について作業を進めている。「アニマルウェルフェアに対応した家畜の飼養管理に関する検討会」が各畜種で開かれ、それぞれの指針が順番に取り決められている。

指針は、どのような飼育方をするのがアニマルウェルフェアの観点から望ましいかを決めているもので、義務ではなくまずは努力目標ということになっている。

例えば先日決定した採卵鶏の指針では、飼育密度について、鶏1羽当たり430～555cm²が望ましいという海外の基準が引用されている（あくまで義務ではなく推奨値）。そのほかにはデビークは10日齢以内の鶏で行う／24時間以上の絶食は推奨しない。絶水はしない／オールアウト後は洗浄、消毒および乾燥を行う／上段の鶏の糞が下段の鶏に落ちないように配慮する／ケージの高さは、成鶏で40cm以上を推奨する／床の傾斜は8度以下とすることが望ましい／アンモニア濃度が25ppmを超える場合は、換気の改善や排せつ物の除去に努める／などであり、ある程度、現場の状況にも配慮されている。

採卵鶏に引き続き、現在、ブロイラー編の準備が進められており、先日その素案が発表された。この中で、最も注目されていた部分についても明らかになった。

素案では、鶏の健康悪化やケガ、飼料と水、換気、照明の問題等は少なくとも毎日チェックし、記録をするとしている。出荷前には一定時間の絶食をして腹の中を空にするが、輸送の時間も絶食期間に入るのも考慮した上で、過度に長時間の絶食にならないようにする。また、治療の見込みがない場合の安楽死への配慮、敷料（おが屑などの床材）の汚れにも配慮するように求めている。換気については舎内のアンモニア濃度が25ppmを超える場合は換気と床面の改善に努めるとされており、これは採卵鶏と同じ基準になっている。

また採卵鶏と同様、最も関心が寄せられていた1羽当たりの飼養面積についても触れられている。検討会では欧米の基準を採用していくかどうか争点となっており、雌雄別飼いや中抜き（肥育の途中で小さい鶏を一部出荷すること。途中で飼育密度を下げられるので、多めにヒナを入れられる）など、非常に多様な飼育方をする日本では一律の基準をつくることは不可能ではない

かとの見方もあり、議論は難航していた。

例えば欧米の場合、1坪当たり生体重で約110～140kgを基準として、1羽当たりの体重は2kg程度で出荷するので、1坪当たり70羽になる。しかし日本では体重3kg弱で出荷するため、欧米の基準をそのまま導入することは難しいとし、1坪当たり55～60羽程度が推奨されるという書き方になった。日本のような国土の狭い環境では、集約した飼育＝飼育面積の効率化が重要である。羽数が基準であることと、効率的な飼育にも一定の理解を示している点に注目したい。

日本のブロイラー生産成績は世界的に見てもトップクラスにあり、技術の高い生産者はこれ以上の密度で飼っている例もあるが、まずは推奨値としての指針案であったので、何とか受け入れられた。

一方、日本独特の気候風土や鶏舎構造、レイヤー以上に日々進歩している鶏種性能などを踏まえ、推奨値は今後微調整も必要とされている。

今後は上部組織の推進委員会で協議されて、最終的には再度、検討会を開いて最終案をまとめる予定である。

図1：今回基準になった諸外国の基準

EU	最大の飼養密度はいかなる場合でも33 kg/m ² を超えてはならない。ただし、別に定めた条件を満たす場合は、より高密度の飼養が許容される。飼養密度の変更を事前に通知するとともに、換気、温度、湿度等の条件を満たす場合は39 kg/m ² 、死亡率等の条件を満たす場合：42kg/m ²
米国	鶏は育成エリア全体を自由に動き回れるようにすべきである。異なる飼養密度での鶏のウェルフェアは、給餌器や給水器の利用性、点灯プログラム、鶏舎の様式、換気システム、給餌器・給水器設備、敷料の管理及び営農方法に左右されるが、飼養密度は次の値を超えてはならない。 ・生体重2.04 kg 以下の場合：32.8 kg/m ² ・生体重2.04～2.49 kg の場合：37.8 kg/m ² ・生体重2.49 kg 以上の場合：42.9 kg/m ²
ニュージーランド	個々の鶏舎にブロイラーを収容する際の最高飼養密度は、38 kg/m ² を超えないように計画しなければならない。予見できないような事態が発生し、一時的に上回ることがあっても、出荷時の密度は40 kg/m ² を超えてはならない。

図2：同時に行われた日本国内での飼育状況調査から抜粋

	平均	最大	最小
坪当たり出荷羽数	53羽	80羽	29羽
坪当たり出荷重量	151kg	198kg	3kg



畜種アップ アジア養豚獣医学会が開催 ～全農グループの取り組みを紹介

2009年10月26～28日、「第4回アジア養豚獣医学会 (APVS2009)」が、アジア諸国をはじめ世界各国から獣医師、研究者および養豚生産者たちの参加のもと、茨城県つくば市つくば国際会議場にて開催されました。全農グループは、協賛企業の一つとしてスポンサーセミナーとブース展示を行いました。また一般演題でも、全農家畜衛生研究所から3名の研究員獣医師が発表を行いました。その概要をレポートします。

●学会の内容

「養豚獣医診断技術の向上のために」をメインテーマに、疾病や生産獣医療のほか、飼養管理、環境保全、食品安全などに関する課題が取り上げられた。参加登録者数は、国内789名、海外425名、計1,214名のほり、うち190名は国内外の生産者が占めた。

●全農グループの取り組み

①スポンサーセミナー

学会最終日の昼、ランチョンセミナーの形式で開催された。冒頭挨拶では家衛研所長・佐々木隆志が、セミナーの趣旨として、全農グループの持つ技術力と総合的な機能についての紹介と、それらを活かして養豚産業の総合コンサルタントをめざしていくことを話した。

講演は、全農飼料畜産中央研究所種豚開発センター所長・普川一雄より、「全農ハイコープSPF種豚の改良手法、種豚供給体制およびその能力について」、飼中研養豚グループ・鮫ヶ井靖雄より「養豚生産管理ソフト『PICS』について」、家衛研クリニックセンター・金田正彦より、「全農クリニック検査データから見たわが国の養豚場における病原体浸潤動向」が発表された。

②ブース展示

PICS（飼中研）、クリニック事業（家衛研クリニックセンター）、ハイコープSPF豚（全農畜産サービス）、豚用動物薬（科学飼料研究所）についての展示を行った。来場した学会参加者たちに全農グループの商品と技術サポート力をアピールした。

③家衛研からの一般演題発表

豚サルモネラ症や大腸菌症について、家衛研研究開発室が行ってきた研究の一端を発表した。

「実験および野外感染豚のサルモネラ・コレラエイス抗体検出ELISA法の確立と応用」（高田明日香）

「胃酸の中和法による豚浮腫病感染系の確立」（伊益哲）
「乳酸添加飼料の毒素原性大腸菌実験感染豚に対する効果」（田中剛志）

●鹿児島県経済連が優秀ポスター賞を受賞

鹿児島県経済連からは2題の発表があり、川畑獣医師らによるPRRSコントロールの取り組みのポスター展示発表が、優秀ポスター賞を受賞した。同経済連の技術とその企画・実行力が、同学会において認められたことを示すものであり、特筆に値する。

「大規模養豚農場を複数抱えた組織におけるPRRSコントロール/浄化プロジェクト」（川畑忠祐）
「厳密なバイオセキュリティによりPRRSの追い出しに成功した農場事例」（本田宣明）

●PRRS、PCVAD、ウイルス性肺炎に大きな関心

八つのワークショップの中で、ポスター展示発表の全280題中115題が「PRRS、PCVAD、ウイルス性肺炎」についての演題であり、各国でもこれらの対策が、重要な共通関心事であることがうかがえた。全農グループとしては、今回の学会参加で得た情報を今後の研究開発や技術対応に活かし、日本の養豚産業発展のため総合コンサルタントをめざしていく。



全農ブースではグループの商品をアピールした